

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（21）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide21/

——抗生物質で太ります！——

失われてゆく、我々の内なる細菌

（マーティン・J・ブレイザー著 3200円 みすず書房 2015年7月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回取り上げるのは腸内細菌。面白いです！

この本、「失われてゆく、我々の内なる細菌」というタイトルでは？？？ですね。ところが一読してすっかり著者のブレイザー教授（ニューヨーク大学・2015年タイムが選ぶ世界で最も影響力のある100人）に心酔してしまいました。それまでは、テレビなどで腸内細菌の話題が増えてきていることはわかっていたものの、いまひとつピンとこないものでした。しかし、本書を呼んで腸内細菌と抗生物質とからめて考えるとすっかり腑におちました。

家畜のエサに低容量の抗生物質を混ぜていることはみなさん知っていると思いますが、その目的が「脂がのって体重が増えるから」だったとは驚きです。腸内細菌叢（＝マイクロバイオーーム）を抗生物質で攪乱すると体重が増えるということが仮説ではなく実際に畜産では実用的に使われているんです。抗生物質の歴史と肥満が急増してきた歴史はシンクロしており、抗生物質やファストフード→腸内細菌叢の破壊→肥満・うつ・糖尿病という流れの分子生物学的なメカニズムも解明されつつあります。特に小児期の抗生物質でマイクロバイオーームが破壊されることや帝王切開でマイクロバイオーームの形成が不十分になることや、ピロリ菌の除菌でも体重が増えること、などなど目からウロコな事実が満載です。

人類と細菌の共生関係は人類誕生以来はぐくまれてきたものです。もちろん結核やペストなど過去に致死的であった細菌感染症が抗生物質で治療できたことはすばらしいことです。しかし、抗生物質の歴史はほんの50年にすぎません。抗生物質を工業的に大量に作り使用するという経験をしたのは我々からなのです。そうしたことが長期的にもたらす副作用があるとしたら、それをまた経験するのもまたこれからの我々なのです。肥満の急増はその最初の兆候なのかもしれません。

抗生物質の大量使用が人体と細菌の共生関係＝マイクロバイオーームを破壊し、多くの現代病を引き起こしているという考え方は、突飛なようにも見えますが、次第にその科学的なメカニズムが解明されようとしている・・・そんな時代の入り口にいるのではないかと感じるびっくりの一冊でした。



みすず書房の本は値段が高いのが玉にキズですが、本書を訳した山本太郎氏による岩波新書「抗生物質と人間ーマイクロバイオームの危機」は本書のコンサイス版という感じで読めます。さらにメカニズム面もというなら「うつも肥満も腸内細菌に訊け！」に進むと理解が深まります。腸内細菌・・・ちょっと目が離せない分野です。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年5月）

関連本・サイトなど

抗生物質と人間ーマイクロバイオームの危機
（山本太郎著 岩波新書 760円税別 2017年9月刊行）

うつも肥満も腸内細菌に訊け！
（小澤祥司著 岩波科学ライブラリー 1300円税別 2017年11月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（22）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide22/

——女性のネットワーク力でノーベル賞！？——

「クリスパー CRISPR」

究極の遺伝子編集技術の発見

（ジェニファー・ダウドナ著 文藝春秋 1600円税別 2017年10月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマはノーベル賞（化学賞？）确实といわれている遺伝子編集技術「クリスパー CRISPR」です、ご存知ですか？これを1000字で紹介するのは至難の業・・・でも、挑戦してみます。

インフルエンザなどの原因であるウイルスというのは遺伝子のかたまりみたいなものです。多細胞生物だけではなく、細菌という単細胞生物に感染するウイルスもあります。細菌にも一度感染したウイルスには感染しないという免疫機構があるのですがその仕組みはなぞでした。本書の著者ダウドナ博士たちはCRISPRと呼ばれる特殊なDNA配列が細菌の免疫現象を担っていることを解明しました。

ものすごく簡単なたとえ話にしてみると、細菌の中にCRISPRという警備員がいて、警備員は要注意人物（＝ウイルス）の顔写真アルバムをもっていて要注意人物を見つけるとボコボコにってしまう・・・とでもいいでしょうか。

科学的に書くと、細菌の遺伝子の中にあるCRISPR部分には過去に細菌が感染したウイルスのDNAがスクラップブックのようにはめ込まれています。ここに、なんらかのウイルス感染がおこるとCRISPR部分からRNA（crRNA：クリスパーRNA）が作られます。感染したウイルスがそのスクラップ帳に合致する塩基配列を持っている、つまり過去の記録と配列が一致した場合には、ウイルスとcrRNAが相補性によって二重らせんを形成します。そこにCas9というタンパク質が作用してウイルスDNAをばらばらに切断します。

ダウドナ博士たちは、さらに、この一連の仕組みの中から「顔写真ケース（crRNA）と相手をボコボコにする仕組み（Cas9）」だけを取り出すことに成功しました。そしてウイルスではなくても「ボコボコにしたい相手の写真を顔写真ケースの中に入れるとその写真の相手を探してボコボコにしてくれる」ようにしたのです・・・そう、つまりcrRNA部分に任意のDNA配列をくっつけたものを他の細胞に入れると、細胞内でそのDNA配列に出会うとその部分で特異的にDNAを切断できるのです（これをCRISPR-Cas9とよびます）。たとえば1個のDNAが突然変異で入れ替わった細胞があるとします。この場合、その変異の前後を含めたDNA配列を持つCRISPR-Cas9を作って細胞内に入れるとその突然変異部分を切り取ることができるわけです。



これまでも遺伝子操作はありました。しかしそれは、ある程度ラフに切断してつなぎなおし、その後で目的にあった変化があるものをスクリーニングするという、不確実で気の遠くなるような手間とお金がかかっていたのです。CRISPR-Cas9を使うと高校生の生物実験レベルの設備とお金でDNAの任意の場所での切り貼りができるようになったのです。

本書では、そこにいたるまでの道のりがとてもよく書かれていて感動します。科学者（その多くが女性です）が、遠く離れた研究施設の間でのネット会議や学会でのコーヒープレークでのおしゃべりなどを通して啓発されたりコラボしたり、少しずつ前進し、ついにはとんでもない発見にたどりついてしまう・・・そんなサクセス・ストーリーです。また、本書はソースノート（引用）がしっかりしており、NatureやScienceに掲載された節目節目の論文をネットで読むことができます（URLが書かれているわけではありませんが論文タイトルで検索するとたいていPDFに到達できます）。臨場感アップしますよ。クリスパーについては一般書でも続々と出版されています（参考図書）ので、本書が難しければこちらにも挑戦してみてください。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年5月）

関連本・サイトなど

ゲノム編集とは何か 「DNAのメス」クリスパーの衝撃
(小林 雅一著 講談社現代新書 800円税別 2016年8月刊行)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（23）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide23/

——ガラガラポン・・・に負けない！——

「反脆弱性」

不確実な世界を生き延びる唯一の考え方

（ナシーム・N・タレブ著 上2000円税別 ダイアモンド社
2017年6月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドさせていております。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「リスク論」。タレブの新作を取り上げます。タレブと言えば2009年の「ブラック・スワン 不確実性とリスクの本質」がベストセラーになりました。え、読んでない！？保険に関わっているなら「ブラック・スワン」は必読書です（映画のブラック・スワンとお間違えないよう）。

以前にも書きましたが、保険の数理といいますか統計は一定の傾向の継続を前提にしています。しかし、2009年タレブがベストセラー「ブラック・スワン」で提起したのはそんな継続性が断ち切られるような「不確実性＝ガラガラポン（相転移）」に満ち満ちた世界でした。では不確実性の世界で我々はどうやって生き延びていくのか、その実践編ともいえるのが本書、「反脆弱性」です。この本の魅力はカバーにしっかり書かれているのでそのまま引用しても魅力がよく伝わってきます。

（上巻）リーマン・ショック、アラブの春、地震と津波、そして原発事故・・・昨日までは「ありえない」「絶対ない」と言われた事象が今日、現実のものとなる不確実な世界。ではどうすれば、ビジネスから、政治、医療、生活全般まで、ランダムで、予測不能で、不透明で、物事を完璧に理解できない状況でも、不確実性を味方につけ、したたかに生き延びていくことができるのだろう。

（下巻）経済、金融から、教育、テクノロジー、食事、健康、果ては人生や愛まで。世界最高の哲人タレブが、ありとあらゆる事象に潜む「脆弱性」と「頑健性」そして「反脆弱性」について語り尽くしたとき、ついにこの不確実な世界のバランスを崩す「犯人」が明らかになる。

どうです、読まずにはいられないでしょう！医療や保険も題材としてふんだんに取り入れられているので興味倍増で理解しやすい。タレブの本はダイヤモンド社が出版しているためか書店ではビジネス書の棚にありますが、哲学的でもあり、啓蒙的でもあり、「ビジネス書なんて・・・」と言わず手にとって読み始めてください。繰り返しますが、「ブラック・スワン」とともに保険業界人必読の書です。アンダーライティングをするには非線形の思考力が必要だということもよくわかります。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年6月）



関連本・サイトなど

「反脆弱性」不確実な世界を生き延びる唯一の考え方
(下)

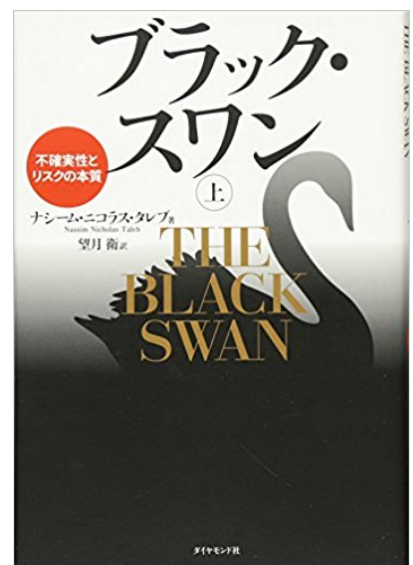
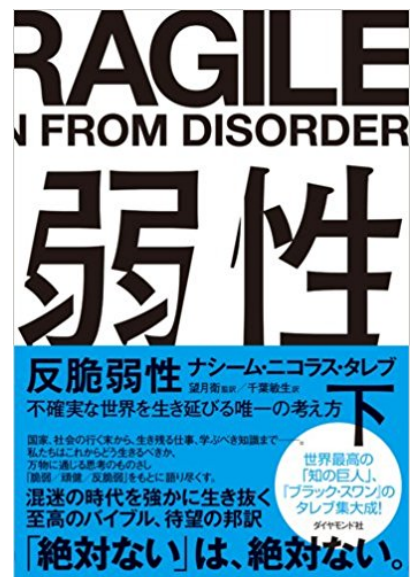
(ナシーム・N・タレブ著 下2000円税別 ダイヤモンド社
2017年6月刊行)

すでにリスク論の古典2009年6月刊行

「ブラック・スワン (上)」 (N・N・タレブ著 1800円税
別 ダイヤモンド社)

すでにリスク論の古典2009年6月刊行

「ブラック・スワン (下)」 (N・N・タレブ著 1800円税
別 ダイヤモンド社)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（24）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide24/

——腹くう鏡手術の黒歴史——

大学病院の奈落

（高梨ゆき子著 1600円税別 講談社 2017年8月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは腹くう鏡手術。2014年に起こった「群馬大学病院腹くう鏡的肝切除連続死亡事件」のドキュメンタリー「大学病院の奈落」を取りあげます。

「大学病院の奈落」というタイトルからは、一方的な医療糾弾モノではないか・・・と思って読み始めました。しかし、期待は良い意味で裏切られ一気に読んでしまいました。外科出身のわたしにとっては耳に痛いこともたくさん書かれていました。非医療者である新聞記者が、ここまで調べつくして、また事件の本質のみならず、その背景にある日本の医師（特に外科医）のメンタリティの問題点までも描き出しているのは見事です。抑制のきいた調査報道で淡々と事実が述べられていますが、それがかえって鮮明な印象を残してくれます。

おヘソの近くに小さな穴を開け、そこから挿入したカメラの画像を見ながら、別に開けた穴から入れた手術道具で胆のう摘出手術やってしまう・・・という腹くう鏡下胆のう摘出術が始まったのは30年位前でしょう。わたしも臨床時代にやりました。それから30年の間に、胃や大腸さらには肝臓・膵臓と対象臓器が広がっていった、「どんなもんだい、こんなことまで腹くう鏡でできたぜ！」というブームが確かにありました。そしてブームのかけでかなり無茶なことが繰り返されているのでは・・・とみんなうすうす感じていたのです。

無茶でも結果オーライですませていた、というのがこの事件以前の状態でしょう。保険適応外の腹くう鏡・内視鏡手術を、開腹術と偽って（あるいは小さな穴を開けるので開腹だと強弁して）保険請求することを医師も厚労省も「なんとなく」容認、この「なんとなく」がどんどん拡大するのは世の常。

ここからはわたしの想像ですが、そんな状態の中に、あまり外科医としての適性のない外科医が登場。通常、適性のない外科医は、それこそなんとなく淘汰されるものなのですが、群大外科では組織の統制力がなくなっていたのでしょうか？はたまた、腹くう鏡手術そのものに術者のうまいへたがわかりにくい性質もあるのでしょうか？その外科医がバンバン腹くう鏡的肝切除をする事態に……。恐ろしい。



亡くなった患者さんの多くが進行がんであったり、残存肝機能がとぼしかったりと、そもそも手術適応があったのかということも取り上げられています。臨床時代に進行癌でも万が一つでも切除可能性があればと、患者さんを説得して強引に手術をすすめていた自分と重なる部分もあります。外科医の武勇伝的なメンタリティー、確かにありました。まさに他人事ではない話です。

本書の著者は読売新聞医療部の女性記者で、一連の群大病院スクープ記事で2015年度新聞協会賞を受賞。医療、特に腹くう鏡外科の裏側や大学医学部の中・大学同士での権力闘争などなど充実した内容は読み応え充分です。

人には、やはり適性というものがあります。資格と適性がかならずしもマッチしない場合も多い。適性のない職業につくことは本人も大変ですが、医師だと人の命にかかわります。アンダーライターであれば危険差益に大きな影響も・・・。

「医を学ぶ者、もし生まれつき鈍にして、その才なくんばみづから知りて早くやめて、医となるべからず（貝原益軒 養生訓から）」（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年6月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（25）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide25/

——その直感は間違っている！？——

かくて行動経済学は生まれり

（マイケル・ルイス著 文藝春秋 1800円税別 2017年7月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは、なぜ直感でくだした査定判断は間違えるのか・・・を行動経済学から読み解きます。

「行動経済学」って？アンダーライティングと何の関係が？と、言われそうですが、かなり関係があります。アンダーライティング、特に引受判断では不確実な情報つまりグレーなものをもとにして、白か黒かの判断しなければならないのはご存知のとおり。そんなとき、ぎりぎりのところでは、自分の持っている知識や過去の経験から直感的に判断することがほとんどでしょう。ところが、こうした直感的な判断（ヒューリスティックといえます）って結構、間違っていることが多いんです。

「行動経済学」と経済という言葉が入ってはいますが、本質は人間の判断にからむ心理学＝「認知心理学」と考えたほうがいいでしょう。経済学では人間を「経済合理的な判断をする存在」として扱ってきたわけですが、それは買いかぶり、やっぱり直感でかなり間違いおかしているんです。

そんな人間の間違いやすさを研究したのが本書の主人公、イスラエル人のカーネマンとトベルスキー。この研究は特に経済行動の分野で発展したこともあり、トベルスキーの死後、2002年にカーネマンはノーベル経済学賞を受賞しています。

この本の著者のマイケル・ルイスはハリウッド映画にもなった「マネー・ボール」の原作者。「マネー・ボール」は、大リーグの選手発掘に統計手法を導入して貧乏チームを強豪に一変させるというドキュメンタリーです。「マネー・ボール」を読んだ行動経済学者から「この作家は、野球をよく知るスカウトたちがなぜ選手の能力を見誤るのか、もっと深い理由があるのをわかっていない」と批判されたことが本書執筆の発端となりました。

いわゆるプロの勘というものがいかに誤りをおかしやすいか・・・耳がいたいところですね。似ているからといって安心する「代表性ヒューリスティック」、手近なものや見慣れたものを無条件で信じる「利用可能性ヒューリスティック」、・・・「妥当性の錯覚」に「アンカリング」に「確証バイアス」などなど・・・（ひとつひとつは是非本書を読んでみてください）ああ、そんな間違い、あるあると思うことうけあいです。



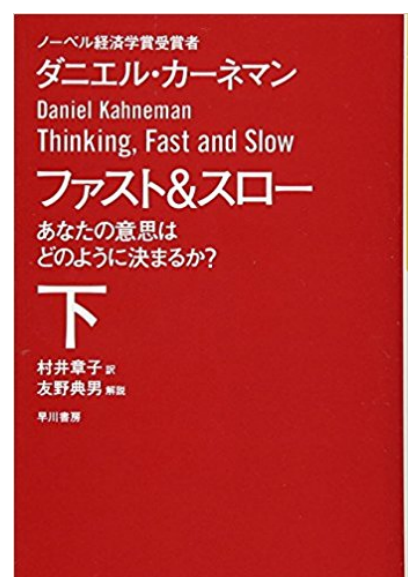
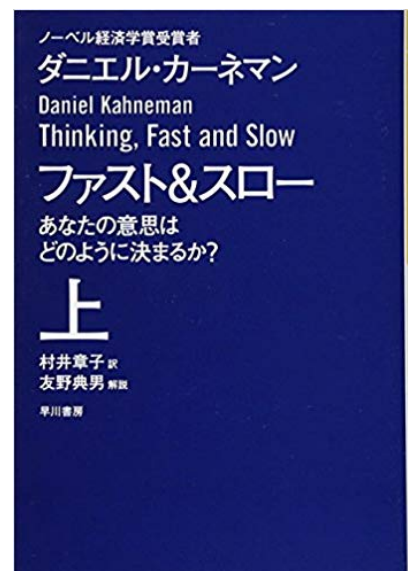
本書はカーネマンとトベルスキーのライフ・ヒストリーをたどりながら、そうした人間の間違いやすさの解説をちりばめるという構成になっています。医学的判断にも1章があてられていて、「そうそう、自信满满でこういうまちがった判断をする人っているよなー」とすっかり納得しました。

恐ろしいのは、この間違いやすさを利用（悪用？）して、フェイク・ニュースやネット広告が我々を誤判断に誘導しようとしているということです。ブレグジットやトランプの逆転勝利など・・・我々の直感は行動経済学であやつられてもいるのです。あなたも「何でこんなものを買ってしまったのか？」ということありませんか。本書を入門書として、カーネマンのベストセラー「ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか？」まで読み込めば、沈着冷静なアンダーライターになれるかも。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年7月）

関連本・サイトなど

ファスト&スロー(上) あなたの意思はどのように決まるか?
(D・カーネマン著 ハヤカワ・ノンフィクション文庫 840円
税別 2014年6月刊行)

ファスト&スロー(下) あなたの意思はどのように決まるか?
(D・カーネマン著 ハヤカワ・ノンフィクション文庫 840円
税別 2014年6月刊行)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（26）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide26/

——薬害vs 薬害でっちあげ——

10万個の子宮

あの激しいけいれんは子宮頸がんワクチンの副反応なのか
(村中璃子著 平凡社 1600円税別 2018年2月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「子宮頸がんワクチン」。薬害でっちあげが引き起こすワクチンアレルギー社会に警鐘を鳴らし続ける村中璃子氏の「10万個の子宮」を紹介します。

日本では年間に子宮頸がんのため摘出される子宮が1万個、子宮頸がんでの死亡者が3千人です。これらは子宮頸がんワクチン（抗ヒトパピローマウイルスワクチン）が広く接種されれば防ぐことができるものです。このワクチン、2010年頃に発売されたもので、ワクチンでがんを予防できるという画期的なものでした。日本でも当初は70%の接種率で、子宮頸がんの大幅な減少という明るい未来が見えたはずだったのですが・・・なんと、2013年4月、定期接種化された2ヶ月後に薬害騒ぎが燃え上がり「積極的な接種勧奨の一時差し控え」というよくわからない状態を厚生省が作り出しました。そのため接種率は激減し1%にまで落ちています。名古屋市の7万人の大規模調査では、被害者の会が副作用とっている症状の発現はワクチンを接種していない少女にも同じくらい起こっているという結果が出ているにもかかわらずです。

2013年3月に子宮頸がんワクチンの副作用で被害を受けたという被害者の会ができ、車椅子の少女たちが並んだ映像をマスコミを使って発信する中での「積極的な接種勧奨の一時差し控え」は、まるで副作用被害が真実であると国が認めたかのようなイメージを世間に与えました。被害者の会は2016年に国とワクチンメーカーを提訴。この手の薬害裁判は10年ほどかかるのが普通のもので、その10年間のワクチン空白のために将来、摘出される子宮が10万個・・・というのが本書のタイトルの意味するところなのです。

反ワクチン運動というのはどこの国でもあるようで、有名（といっても本書で初めて知りました・・・不勉強）なのはイギリスでのMMR（麻しん・風疹・おたふく風邪）ワクチンで自閉症になるというデマに端を発したウェイクフィールド事件です。これは、自閉症児をもつ親を組織化してMMRワクチンを標的に賠償金を得ようとした弁護士とウェイクフィールド医師が捏造論文で引き起こしたもので本書にもくわしく書かれています。

著者の村中先生はおそらく反ワクチン派から相当な攻撃を受けているのですが、それに正面から立ち向かう姿勢には強いパワーを感じます。あっという間に読み終わりました。熱い本を読みおえた感じです。しかし、北風と太陽ではありませんが、強烈な言葉の応



酬になればなるほどアンチ派は納得することはないだろうなと思います・・・現に、Amazonのレビューでも90%の絶賛レビューと10%の全否定レビューが並んでいます。

最後にWHOが2017年7月に出した声明（下記関連サイト①の最後のパラグラフ）を引用しておきます。「子宮頸がんワクチンを適切に導入した国では若い女性の前がん病変が約50%減少したのとは対照的に、1995年から2005年で3.4%増加した日本の子宮頸がんの死亡率は、2005年から2015年には5.9%増加し、増加傾向は今後15歳から44歳で顕著になるだろう」（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年7月）

関連本・サイトなど

①WHO

②村中璃子

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（27）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide27/

——その検索、大丈夫？？——

健康を食べ物にするメディアたち

ネット時代の医療情報との付き合い方

（朽木誠一郎著 ディスカバー携書 1000円税別 2018年3月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回取り上げるのは、みなさんもよく使っていますよね！「ネット検索」。

芸能人が「がん」になり怪しい民間療法を受けて亡くなったという話がときどきあります。週刊誌で読むと、その怪しい治療にはまってしまいうきかけがネット検索だったというのはいかにも現代的な話です。ニュースになるのは氷

山の一角でしょうから、一般人でもそうした患者さんはかなりいそうです。医師であれば自由診療のがん治療は怪しい治療なのではないかとすぐに感じますが、その怪しい治療をやっているのもまた医師であるわけで・・・おそらく、一般の人にはその怪しさがわからないのでしょうか。怪しい自由診療で荒稼ぎ・・・の話、はまた別の機会にゆずるとして、今回はこのネット検索と医療情報の話にしぼってブックガイドをしてみます。

この本でまず認識できたのは、まとめサイトとネット広告のしくみ。そこではPV＝ページ・ビューの数でお金が発生しているということです。つまり何回そのページが開かれたかでそのページに広告を出している企業からの広告料が決まるということです。つまり、そういうサイトを作った人は、とにかくリンクをクリックさせて広告が載っている（広告だとはわかりにくい場合も多い！）ページを開かせようとしています。

Naverなどの一見便利なまとめサイトもすべて原理は同じです。わたしもこの本読むまでは「どこのヒマ人がこんなおまとめ作るんだろう」と思っていたのですが、すべて広告料に連動しているんです。ですからそのページへのリンクにはいかにも興味をひきそうな言葉がならんでいます。

そんな「おまとめ」を誰が書いているのでしょうか？よく「自宅にいながらネットで記事を書くバイトしています・・・」という主婦をテレビで見ますが、実はそんな人たちが書いているんです。書くときにも本を読むわけでもなくネット検索からコピーしてアレンジするだけです。Naverの場合はこうした「おまとめ記事」の途中やサイドバーに記事に連動した広告が掲載され、PVに比例して広告主から運営会社（Naverの場合はLINE）に報酬が払われます。そして運営会社はその報酬の一部の記事を書いた人に支払うというビジネスモデルです。



建前上は運営会社は「おまとめ記事」を書きたい人にプラットフォームを提供しているだけということになっていますから、記事の内容には責任を負いません。つまりその記事で、コピーで著作権が侵害されていても、いいかげん情報を信じて健康被害があっても、記事の書き手と読み手の問題というしかけです。

これらのことがこの本でスッキリとわかりました。著者はDeNAが運営していて問題山積で消滅してしまった医療情報サイトWELQの事件の告発者のひとりのようです。著者は群馬大学医学部卒の医療ライターでおそらく医師免許を取得していないという経歴ですが、医学部出ていろいろな仕事している人増えています。

ちょうどこの本を読み始めた5月の初めに「医療機関、ウェブにも広告規制 患者の体験談も禁止へ」という報道がありました。6月1日の改正医療法で施行されるようですが、「おまとめ」問題は含まれていないようです。急発展でしくみがよくわからないネット広告の世界でもすこしずつ・・・ルール作りがすすむのでしょう。査定のために医学的なことを検索して、ついついあやしい「おまとめ」に引き込まれてしまうあなた（も私も・・・）、ネット広告の裏側、知っておくべきですね

それにしても暑いです。熱中症になりそうで自宅とオフィスの往復以外は外に出られません・・・。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年8月）

関連サイト

[医療法改正についての「おまとめ」](#)

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（28）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide28/

——エイズの歴史に教えられること——

エイズの起源

（ジャック・ペパン著 みすず書房 4000円税別 2013年7月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今日のテーマはエイズ、HIVです。薬剤も開発され、エイズはコントロールできる病気になりつつあります。今回はエイズの歴史をひととおりおさらいできる三冊を選んでみました。



まずは「エイズの起源」。中央アフリカの地方病的な類人猿由来のウイルス感染症がいかにして世界中に拡大し2500

万人の命を奪うまで流行したのか。そのプロセスがくっきりとわかる名著です。アフリカが近代化し都市化が始まると労働者男性の都市集中がおこり、それが売春の隆盛を引き起こし辺境の感染症が一気に拡大します。時期を同じくして、アフリカ諸国の独立をめぐる政治的混乱のなかでハイチやアンゴラからの人材支援の人々が中央アフリカと母国を往復したことが、地域から世界への拡散につながりました。さらにハイチがアメリカの性的リゾートであったこと、中米の血液製剤産業が増幅装置となったこと、などなど。医療用血液製剤があらんだところはC型肝炎の拡大とも似た構図です。中国などに比べて、日本でエイズ感染が小規模にとどまったのは肝炎問題が先行したことで売血が禁止されていたからだとも言えるでしょう。

2冊目は、日本の薬害エイズ事件の時期に偶然厚生省の担当課長だったために人生がかなり大変なことになってしまった郡司篤晃氏（2015年死去）が書いた「安全という幻想:エイズ騒動から学ぶ」です。薬害エイズ事件を冷静に振り返っており、「エイズの起源」で基礎知識を学べば、郡司氏の意見のほうが合理的で、あの頃のバッシング報道には疑問も多いことがわかります。厚生大臣（菅直人氏）が急転直下謝罪・和解するというある意味政治的パフォーマンスに走ったため、学問的に裁判を闘っていた郡司氏らは梯子をはずされたかっこうで辛酸をなめました（のちにB型肝炎訴訟でも菅氏は総理大臣として同様の行動をとりました）。わたしも当時の報道を鵜呑みにしていたのですがあらためて勉強になりました。

3冊目は「エイズを弄（もてあそ）ぶ人々」。南アフリカのエイズ蔓延の原因「HIV否認主義」の話。「エイズの原因はHIV感染ではない」という主張をする科学者も含む集団がいることは驚きです。一種の疑似科学なのですが、それを真に受けて政策にしてしまうことで祖国をエイズ大国にしてしまったのが南アフリカのムベキ大統領（当時）。恐ろしい黒歴史で

す。このような疑似科学がらみの事件はネットのフェイク記事とからむことで日本でも他人事でなくなっています。薬害エイズ事件もある意味不確実なバッシング報道に翻弄されたわけで、同じ構図は現在の子宮頸がんワクチン騒動へもつながっていきます。

三冊ともやや古い本になりましたが、エイズの歴史を学ぶことで、エイズだけではなく他の疾患でも顔を出す、政治・経済の関わり、さらには疑似科学の介入などのダイナミズムを考えさせられます。いつでも真っ当に科学的でいられる努力を続けたいものです。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年8月）

関連本・サイトなど

安全という幻想: エイズ騒動から学ぶ

（郡司篤晃著 聖学院大学出版会 2000円税別 2015年7月刊行）

エイズを弄ぶ人々 疑似科学と陰謀説が招いた人類の悲劇

（セス・C・カリッチマン著 化学同人社2200円税別 2011年1月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（29）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide29/

—— 日本の医療はここが不均一！ ——

日米 がん格差

「医療の質」と「コスト」の経済学

(アキよしかわ著 講談社 1800円税別 2017年6月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今日のテーマは「日米のがん格差」。

「がん格差」とは、「がん治療の格差」のことです。アキよしかわという著者名からはいったいどんな人物かな・・・と思いましたが、本書はかなりまっとうで面白い。著者は10代で単身渡米し、医療経済学を学んだ後、スタンフォード大に医療政策部を設立、欧米、アジア地域で数多くの病院の経営分析に従事という経歴です。日本の医療界に「ベンチマーク分析」を広めたことで知られる・・・とあります。Global Health Consulting Japan会長。会社のHPを見るとなんとなくその仕事というのはわからなくもない。そのアキよしかわ氏が大腸がんになって日本で手術を受け、ハワイで化学療法を受けたという経験をとおして、日米のがん医療のちがいを的確に示してくれます。

最大の違いは、日本では病院ごと、さらには医師ごとの治療の「質」のバラつきが大きいこと。これに対してアメリカでは保険制度のちがいもあって「コスト」のバラつきは日本より大きいけれど治療の「質」はバラつきが少ない。これは、診療ガイドラインの遵守がアメリカではかなり厳格に守られているのに対して、日本では医師の判断でガイドラインを逸脱したり、ガイドラインに沿っているように見えて恣意的に医師側の都合のいいゾーンに割り振られるというようなことが起こっているから。なぜそんなことが起こるのかというと、それはそもそも、日本では医療機関の設備や人員のバラつきが大きく、ない袖はふれないから。そんなことがベンチマーク解析で統計的に明らかにされていきます。

その結果として、いい医療を受けるには、アメリカではいい保険に入っていることが必要なのに対して、日本ではいい病院、いい主治医にめぐりあえること・・・いやあ、実感としてよくわかります。

もうひとつ面白いと思ったのが用語のちがい。本書の著者の大腸がんはRs（直腸S状結腸移行）部に発生したものだのですが、これを日本では「直腸がん」と表現するのに対しアメリカでは「結腸がん」と表現する。この表現の違いでガイドライン選択のちがい（化学療法や放射線療法の要否）が出てきます。このような基本的な用語のそもそもの使い方で日米



差があるのです。ということは、われわれが支払査定でWHOのブルーブックの表現がどうのこうのと言っているときに、そもそもの用語理解でWHOの本質からはずれている場合が結構あるんだろうなあ・・・と。

ここ数年、日本の医療もガイドラインが充実してきているので日米差は小さくなっているのかもしれませんが、しかし、やはり医師である私も・・・いや医師だからこそ、自分や家族の病院選びのときの態度は著者がいうとおり・・・かなり吟味してしまいます。当たり外れは確かに大きいし、トンデモクリニックがあることもまた事実。まさに痛いところを突かれました。学ぶべきこと多い一冊です。

(査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年9月)

関連本・サイトなど

[Global Health Consulting Japan](#)

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（30）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide30/

—— 最近の若いドクターを理解するための必読書 ——

フリーランス女医は見た 医者の子孫

（筒井富美著 光文社新書 740円税別 2017年1月発行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「最近の若いドクターはどうなっているのか？」・・わたしはこの本、大変勉強になりました。

アンダーライティングの職場にドクターと一緒にいるという場合も多いですね。時には若い先生が同僚になることがあるかもしれません。最近の若い先生は・・・なんて年寄りのグチっぽく聞こえるかもしれませんが、医師の世界ではグチとばかりもいえません。なぜなら2004年を境に、医者になったのがそれ以前か以後かで大きな違いがあるのです。というのは、2004年から「新医師臨床研修制度」というのが始まったからです。この新制度で研修医は「下働きの何でも屋」から「お客さま」になっていたのです（知りませんでした）。

この研修制度のガイドラインによれば「研修医に雑用をさせてはいけない」「本人の同意のない時間外労働は禁止」「研修医がミスしても叱らず・・・」「研修医が体調不良やうつ状態を訴える場合は、指導医は仕事を減らしたり、休業させたりするべき（2年間で最大90日まで可）」・・・。これによって、わたしの研修医時代のような、まるで自分の限界をためられるような修行の日々は「パワハラ」「ガイドライン違反」の過去の遺物となり、初期研修時代は天国になったのです。

そして今、この天国のような研修医期間を終えた先生たちは、それ以前の医師とはちがうメンタリティーを持つ医師として実践の場（後期研修といいます）に入っていきます。ところが2年間の初期研修の間に「お客様」ながらも、医療の現場のリアルを知り、それまでもっていた夢や理想は大きく崩れてしまいます。夜中の呼び出し、患者からの理不尽なクレーム、訴訟対策の書類の山、これらに疲弊した先輩医師の姿を見て、いつしか医師になったときの情熱は醒め、冷静に収入やQOML（＝Quality of My Life）の高い専攻科（具体的には皮膚科・眼科・精神科）を選ぶようになるのです。

また不景気や産業構造変化の先が見えない状況から食いつばぐれのない職業として医師を目指す傾向もあり、女性医師も40%を超えるまでになっています。男女に限らず、医師にはなってみたものの、患者と接する段階になって「向いていない」と気づくことも多く、さまざまな形でドロップアウトしたり、フリーター化したりすることもしばしば。アンダーライティングの業界にもそんなドクターが？



著者の筒井先生は、50代ようですが、麻酔科医です。麻酔科は病院に所属しなくても仕事ができる（いわばフリーランス医師）ので、さまざまな病院で出会った若い医師の生態をあますところなく教えてくれます。さらに、返す刀で病院に巣くう、既得権にしがみついた老害医師も一刀両断。最近の大学病院や大きな病院の裏事情もマルわかりです。まあ、自分も老害医師の一人なのかも・・・ではありますが・・・。とにかく、近くに若手のドクターがいるのであれば、あるいは若いドクターを採用するような立場であればこの本を一度読んでおくことは必須です。

本文中にある「ネットでサクッと確保できるような人材」は「ネットで見つけた次の病院（会社）にサクッと転職するリスクが高い」・・・まさに名言であります。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年9月）

関連本・サイトなど

麻酔科医ハナ

（アクションコミックス なかお白亜著 全6巻 各600円税別
2008年～刊行）

・・・この漫画も新世代医師像がよくわかりオススメ！です。

